

## ピア・レビュー

本欄では各論文についてのピア・レビューを掲載した。各論文の趣旨および今後の展開可能性について論じられている。本文を読む際に参照されたい。

### ○河崎吉紀「メディア議員の出世―関和知と『新総房』を例に」

佐藤卓己・河崎吉紀編『近代日本のメディア議員』（創元社・二〇一九年）の計量的分析を踏まえ、「メディア議員」の質的分析に踏み込む第一歩を刻む論考である。ここで筆者が「メディア議員」の典型として取り上げる関和知は、貧しい家庭に生まれながら小学校代用教員から東京専門学校（のち早稲田大学）に学んだ千葉県選出の衆議院議員である。憲政会幹部として加藤高明内閣で陸軍政務次官に就任しているが、五四歳で亡くなったため日本政治史上では必ずしも有名な人物ではない。敢えてこの人物に着目した理由は、政治的野心に燃えた自由民権期の青年が「教育とメディア

」を駆使して衆議院議員となり、「メディア・パフォーマンス型」議員へと転身していくプロセスを確認したかったためだろう。その「教育」とは早稲田関と海外留学経験であり、「メディア」とは最初に創刊した雑誌『新房総』やがて日刊紙化した同名の新聞である。本稿では、国政進出以前の関の生い立ち、明治期千葉県の新開状況と地方政治を概観し、雑誌『新房総』の記事内容を検討されている。「メディア議員」関和知の青年期をメディア史として活写した論文であり、やがて評伝としてまとめられる作品の第一章となるものだろう。ただし、独立した論文として見れば、関を「メディア政治家」の典型例として取り上げた意義が読者に十分伝わらない憾みが残る。せめて、大正デモクラシー期の関和知の活躍に冒頭で言及して欲しかった。

（佐藤卓己）

○本田毅彦「一九七〇～八〇年代イギリスのテレビ業界に見る王室ソープ・オペラの起源と展開」

二〇一九年に上映されたイギリス・アメリカ合作の

歴史物映画「ダウントン・アビー」は、日本において二〇二〇年一月十日に公開された。二〇一〇年から二〇一五年にかけてイギリスのBBCで放送された歴史物ドラマ「ダウントン・アビー」の続編として、ジョージ五世とメアリー王妃によるダウントン・アビー訪問を描く今回の映画版もグローバルな成功を収めた。本稿は、こうした成功を可能にしたイギリス製の歴史物テレビ番組の「伝統」を描き出すために、デイヴィッド・ダルリンプル・バトラーが脚本を執筆した一九七〇～八〇年代にかけてBBCで放送された五つの歴史物テレビ番組を取り上げた。バトラーが俳優として脚本家としての経歴、そしてイギリスのテレビ業界史上での歴史物ドラマの位置付けを踏まえた上で、本稿は「シユトラウス一族」「エドワード七世」「デイズレイリー」ロマン主義者の肖像」「リリー」「マウントバッテン卿―最後の副王」の内容や撮影裏話とそれぞれの評価について詳述し、近時の「ダウントン・アビー」の成功との関連付けを解き明かした。ほかに、本稿の最後では、こうした番組の中の女性という分析視角を提示

した。今後では、さらにジェンダー視点でも展開できるイギリスの歴史物テレビ番組研究を期待したい。

(彭永成)

### ○水出幸輝「天気予報のメデイア史序説」

来るべき「天気予報のメデイア史」の序説である。従来の気象学者の関心に閉じることなく、「社会との接続」を意識するようになった近年の気象学史研究の動向を手際よく整理しつつ、筆者自身の問題関心を浮かび上がらせている。気象情報を広く社会に伝えてきたのはマス・メデイアであるからこそ、天気予報はメデイア研究の対象となる。

とりわけ近著『(災後)の記憶史』(人文書院)から引き続き筆者の関心は、自然災害に対する恐怖認識の変遷である。戦後日本では長らく地震よりも台風の被害の方が大きかったにもかかわらず、台風への恐怖感が少ない理由として、台風の進路予測が視覚メデイアにより「見える」ようになり、しかもリアルタイムで更新されていくからだという指摘は興味深い。焦点と

なるのは、災害が起きる前の「平時」の認識をどう裏付けていくかであろう。容易ならざる課題に挑戦する筆者の今後の研究に期待したい。

(比護遥)

### ○木下浩一「キャスターニュースと娯楽化をめぐる用語の定義」

テレビのニュース番組で、単に原稿を読み上げるアナウンサーとは異なり、意見も述べるキャスターが登場して、キャスターニュースという新たな形式が生まれた。しかし、必ずしもジャーナリストやアナウンサーがキャスターを務めるとは限らない。芸人やアイドルが起用されるなど、その定義はいまいである。そもそも、テレビジャーナリズムの用語には定義の不明確なものが多い。筆者は研究を進めるうえで、用語の定義を共有することが必要であるという問題意識から、この論考を執筆した。そして、「キャスターニュース」の定義を考えるうえで、鍵となるのがニュース番組の娯楽化であるという。事件報道や芸能を重視するワイ

ドショーの歴史を振り返り、ソフトニュースとハードニュースの概念を比較するなかで、筆者はキャスターニュースの位置づけを試みた。ニュースをハードとソフトに分けるといふ考えは、古くは硬派、軟派といつて、戦前の新聞社にまで遡れる分類である。この論考には、放送研究という枠組みを超えて、広く展開できる可能性が含まれている。

(河崎吉紀)

### ○温秋穎「戦前日本放送協会の言語観について―日本放送協会の放送研究雑誌を中心に―」

本研究は、戦前における日本放送協会の言語観について考察するために、一九三一年から四五年にかけて同協会が刊行した放送研究雑誌を取り上げ、関連する記事を抽出して分析している。数多くの記事が、主要なトピックに対応する形でバランスよく整理されているが、放送用語を実践するアナウンサーの養成をめぐる行われた議論についての分析が、とりわけて鮮明な印象を与える。また、中国語の扱いをめぐる行わ

れた議論が、外国語と日本語の双方の問題が展開する中での接点だった、との温氏の指摘は、この分野での今後の研究のために新たなとば口を開いたもの、と評価したい。さらに、本研究の末尾において、「支那語講座」の存廃をめぐる議論から、「大東亜共栄圏」が中国ないしアジア全体をどのように考えていたのか、その構造の不備を含めて類推できる、との示唆があるが、今後、温氏の研究がそうした視角からさらに進展することが期待される。

(本田毅彦)

○山口仁「ジャーナリズム研究の構築に必要な視座―佐藤卓己・河崎吉紀編『近代日本のメディア議員』の書評に代えて」

本稿は、佐藤卓己・河崎吉紀編『近代日本のメディア議員―〈政治のメディア化〉の歴史社会学』（創元社、二〇一八年）の書評である。

評者は、自身の専門であるジャーナリズム理論研究の立場から本書を読み解いている。評者によれば、そ

もそも一般理論を構築する目的は「複数の事例を横断的にとらえることを可能にし」、さまざまな立場の人が議論をするための「共通の土台」を提供することにある。そして、理論構築のための事例は、決して「現代社会（いま・ここ）」に限定されない。むしろ、実験やアンケートでは収集できない豊富な事例が過去に存在していると評者は述べ、たとえば本書のような歴史研究も「共通の土台」をつくるために不可欠だとする。

そのように本書の意義を示したうえで、評者は本書が設定している分析概念「輿論／世論」や「政治の論理／メディアの論理」について、それらの曖昧さを批判している。この批判は、本書の執筆陣はもとより、広くメディア史研究者が傾聴に値する議論であり、ひいては歴史研究と理論研究との相補的なありかたを説得的に示した実践であると言える。

(花田史彦)

○佐藤彰宣「想起と忘却の重層性―水出幸輝『〈災後〉の記憶史―メディアにみる関東大震災・伊勢湾台風』」

本稿は水出幸輝『〈災後〉の記憶史―メディアにみる関東大震災・伊勢湾台風』(人文書院、二〇一九年)の書評である。評者は、災害の記憶の想起と忘却のプロセスが綿密な新聞報道の分析から明らかになっているとして本書を高く評価し、その意義をさらに高めるための提案を行なっている。まず、分析に用いられた新聞という媒体の特徴の変化が震災語りに関わっている可能性を提示する。各新聞社がメディア利用の多様化という時代の流れの中で他メディアをいかに意識しながら災害報道を行なっていたのか、検討の余地が残されているというのである。次に、本書で明らかになった戦時期における災害の記憶の戦時体制への「動員」が、戦後の冷戦下においても核戦争と関連づけられる形で展開した可能性を指摘している。評者の提案はいずれも戦前と戦後の断絶と連続を〈災後〉の記憶／メディア史の観点から見つめ直す上で極めて重要なものであると言える。「災害」をめぐる想起と忘却から日本社会を見つめ直すという本書の新しい取り組みがいかにも有効な視座となり得るのか、その可能性を理解する

上で重要な論点を提示した書評として評価できよう。

(趙相宇)

○花田史彦「稗史を構想する―原武史『松本清張』で読む昭和史―」

本稿は、原武史『松本清張』で読む昭和史』(NHK出版、二〇一九年)の書評である。

評者は、まず本書の内容について「原ならではの着眼点(鉄道や天皇制)を踏まえつつ整理し、同書を松本清張の小説を政治思想史の「資料」として読み解いた作品として評価している。そのうえで本書の試みを、「創作物とどう向き合うか」という課題に挑んだ歴史研究として位置づける。その際、関連する研究群にも幅広く目配りし、評者の研究対象でもある佐藤忠男の議論なども織り交ぜながら、①作家「松本清張」へのメディア史的な視点、②政治思想史における「女性」への注目、③歴史学者からの清張「黙殺」の有無、といった論点が提起される。

これらの論点をもとに、評者は歴史研究における学

者と作家の領分を理解しつつ、歴史への「真摯さ」を共有する手掛かりとして、稗史を構想した「史論家」・松本清張の存在を捉えようとする。こうした視座は、歴史認識をめぐって「対立」や「分断」が叫ばれて久しい、アカデミズムとジャーナリズムの関係を解きほぐすための重要な示唆を与えてくれる。

(佐藤彰宣)

○松尾理也「悪いニュースはいいニュース？—根津朝彦『現代日本ジャーナリズムの思想』—」

ジャーナリズムにおいては一般的に、暗いニュースが多くなりがちだ。社会問題を扱う以上、当然のことといえる。筆者の松尾は根津の書を批評しつつ、ジャーナリズムのうちでも特に新聞を対象に、「悪いニュース」と「よいニュース」について論考を行っている。「悪い」「よい」以外に、否定／肯定／批判とは何か。「悲しい」「難しい」は「悪いニュース」なのか、あるいは読者を「元氣」にするニュースは「よいニュース」なのか。ジャーナリズムというエンコードは読者のデ

コード（読み）を想定したものであり、一般読者の気分から逃れられない。気分は情動を喚起し、時に大きな動員の要因になる。その意味で、読者に対する影響や効果を重視する姿勢は、もつともである。しかしながらカルチュラル・スタディーズにおけるアクティヴ・オーディエンスの概念からいえば、必ずしも読者のデコードは送り手の想定した通りとは限らず、多様である。エンコードとデコードという切り分けには、より意識的であることが求められよう。

(木下浩一)

○趙相宇「ナシヨナリズム実践としての「8.15」ユキユメンタリー—崔銀姫著『「反日」と「反共」…戦後韓国におけるナシヨナリズム言説とその変容』—」

韓国におけるナシヨナリズム形成のプロセスを、テレビ・ドキュメンタリーの分析を通じて明らかにしようとする崔銀姫の著作についての書評である。同書では、戦後の韓国のナシヨナリズムが、「親日・反日」と「反共」との相互関連、「韓国人論」が表象するミドル

クラスへのまなざし、「在日」への注目とトランスナショナルリズム、戦争責任をめぐる日独比較とグローバルに拡張された反戦意識——といった多様な視点から分析されている。著者と同じく韓国のナショナルリズムに深い関心を寄せる評者は、いくつかの留保をつけながらも、韓国現代史理解に必須かつ東アジアのポストコロニアル問題を考える上で重要な試みであると評価している。

(松尾理也)

### ○彭永成「中国における「家族の個人化」の形——『誰在你家 中国“个体家庭”的选择』——」

本稿は、伝統社会から現代社会に変化しつつある中国における家族の個人化を主題とした『誰在你家 中国“个体家庭”的选择』という学術書を扱う書評である。中国の上海にある一九六六年以降生まれのホワイトカラーファミリー四六戸に対してフィールドワークをしたのが本書における最大の特徴であり、現代中国家庭における個人化という現象を説明する鍵と言える。

家族の個人化というキーワードの下で、彭氏が指摘しているように、本書は一人つ子の個人化、男尊女卑という伝統の変質、親子関係などのミクロな側面を詳しく説明している。なお、本書のさらなる発展の可能性として、男女の結婚を契機として変動する家族内部の権力関係や、西洋の理論では捉えきれない儒教文化圏である東アジア社会の個人化、家庭という親密圏の個人化が公共圏に与える影響などの課題が残っており、今後のより深い研究が期待できる。

(温秋穎)

### ○比護遙「情報技術のグローバル・ヒストリー——Thomas S. Mullaney, *The Chinese Typewriter: A History*——」

本稿は、Thomas S. Mullaney, *The Chinese Typewriter: A History* (MIT Press, 二〇一七)の日本の読者に向けた紹介および書評である。評者は「コンピューター前史にあたる中国語のタイプライターの歴史」を辿る本書を、章ごとに丁寧なまとめ、東アジア史研究やメディア

ア史といった領域における本書の位置づけを論じた上で、最後に「中国史研究者にとどまらず広く読まれるべき一冊である」と高く評価している。評者のコメントの中で、とりわけニュースメディアであったラジオの普及と発音の標準化との関係はこれまで論じられていたが、活字メディアをめぐる技術革新が言語に与える影響に関しては十分に検討されていなかったという指摘は興味深い。この点を深く掘り下げるために、著者のマラニー（および評者）の今後の研究が期待できるだろう。また、本書は、欧米ないし中国においても好評を得ているが、これまで日本では関連情報が少なかつた。それゆえ、漢字を共有する東アジア圏の近代史を振り返る上で「技術言語学」という新たな見方を提示する興味深いこの一冊を、評者が日本の読者に紹介する意義は大きいだろう。欲を言えば、これまで欧米と中国で本書がどう評価されてきたのかにも触れて欲しかった。

（王令薇）